



リサイクルでつなくサステナブルな未来

リサイクル協 ニュース

101
FEB. 2026

Go to the
**CE
CITY**
サーキュラーシティ探訪

南 三 陸 町

- INDEX**
- 1 PICK UP
目指すは「ちょうどいい循環」。
使い終わった衣服・雑貨を資源に
 - 3 Goto the CE CITY サークュラーシティ探訪
インタビュー SDGsアクション
 - 5 明日、誰かに話したくなる pnn'sプラのなぜ？なに？
容リSTUDIES
 - 6 NPO法人 持続可能な社会をつくる元氣ネット
理事長 鬼沢 良子氏
 - 9 容リSTATION 協会の主な取り組み内容をご紹介します
ecoワードパスル
 - 11



**今号の
PICK UP!**

不要になった商品を
回収・再商品化する
資源循環活動「ReMUJI」。
一期一会の楽しさや
無印良品らしい
デザインが好評!



目指すは“ちょうどいい循環”。

1980年の創業以来、大量消費社会へのアンチテーゼとして「素材の衣料品の回収を始め、その後プラスチック製品を店頭回収するなど、同社は「無理をせず、小さなことでも続けることが大切」という姿勢で、

不要になった商品を回収し循環させる 資源循環活動「ReMUJI」



株式会社良品計画

一期一会の楽しさや無印良品らしいデザインが好評

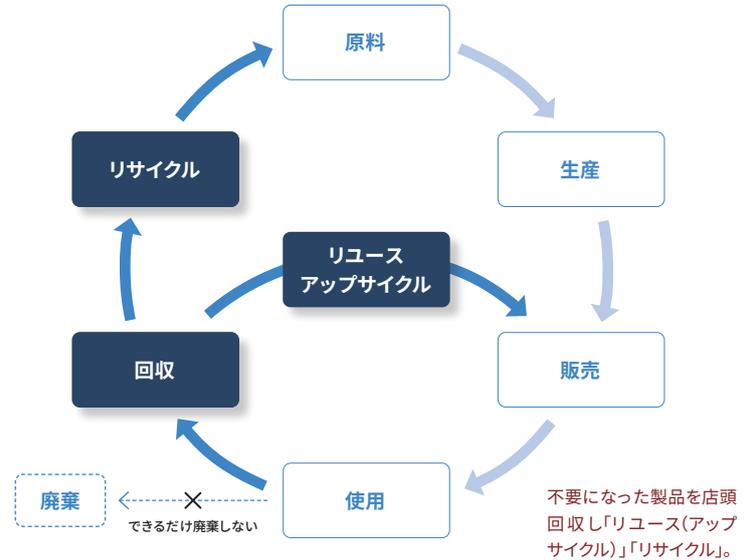
(株)良品計画では2010年から、使い終わった衣料品を店舗で回収し、その後2015年から価値ある製品として再販売する「ReMUJI」を展開。2023年には循環推進部も立ち上げ、生産や店舗、物流部署と連携しながら仕組みを構築しています。

「2010年、無印良品は使用済みの繊維製品をバイオエタノールなどのエネルギーに変えることを目的に衣料品の回収を始めましたが、まだ十分に着られる状態の良い服がたくさんあることに気がつき、2015年より品質の良いものを選別して手を入れ再び販売するリユースの取り組みが始まりました」(本釜真由美氏)

衣服リユースにより新たな命を吹き込まれた「ReMUJI」シリーズは、「染めなおした服」「洗いなおした服」「つながる服」として現在、全国約50店舗で展開されています。

『「染めなおした服」は日本の伝統的な藍染めから着想したネイビーや黒、グレーが主ですが、無印良品のレトルトカレーをつくる際に出る玉ねぎの皮など、残渣から抽出した

「ReMUJI」製品の一例。不要になった衣服を染めなおし、洗いなおし、つなぎあわせて新たな価値を生み出しています。



(左から) (株)良品計画 循環推進部 部長 本釜真由美氏、循環推進課 川上真由子氏、循環推進課 永戸順也氏(取材当時)。「循環は全社で取り組むべきこと。お客さま、店舗スタッフ、そして生産現場が一体となって、資源を地球のように回していきたい」(本釜氏)という想いが、全国の店舗へと広がっています。



使い終わった衣服・雑貨を資源に

選択」「工程の点検」「包装の簡略化」を追求してきた株式会社良品計画。2010年、全国で「ちょうどいい循環」を目指しリサイクル製品を販売しています。時代を先取りしてきた真の循環型社会の実現に挑み続けています。

INTERVIEW >>> 帝人フロンティア株式会社

ポリエステル繊維製品の完全循環型リサイクルプロジェクトで連携

(株)良品計画は、帝人フロンティア(株)と協働し、回収したポリエステル製品を再び繊維へ戻す、水平リサイクルプロジェクトを本格始動させています。現在、国内では年間約82万トンの衣類が供給される一方、56万トンが廃棄され、衣服から衣服へ戻るリサイクルは1%未満なのだとか。

「ポリエステル100%の服でも、裏地やボタン、形を整える芯地などの副資材が混在しリサイクルが容易ではありません。着色された繊維は色を抜かな

ければならないという障壁もあります。そこで、2022年に開発した衣服から異物や色を除去し再生する新技術をもとに、回収した衣類を資源としてまた新商品に還すプロジェクトを2024年12月より開始しました」(重村幸弘氏)

2040年までに全廃棄衣類の再資源化を目指し、業界の垣根を越えたコンソーシアムも立ち上げました。

「企業側もコストだけでなく、地球環境を守る努力を続けていくことが大事だと考えています」(重村氏)



無印良品「素材に還る フリースカーディガン」など単一素材の“易リサイクル商品設計”へ助言も



帝人フロンティア(株)
取締役執行役員 技術・生産本部長
重村 幸弘氏



左／「ReMUJI WEEK」を年に数回開催。右／「わけあり品」の販売の様子。

染料を一部活用した『染めなおした服』も展開しています。また、ポリエステルなどの化学繊維は染まらないので、ステッチが白く残ったりして予想外の魅力が生まれるといったこともあります。少し損傷がある服の使える部分を組み合わせ、新たなデザインに仕立て直した『つながる服』も、お客さまからは一期一会の楽しさや宝探し感があると好評です」(川上真由子氏)

2020年からは化粧水ボトルの回収を全国ではじめ、その後、プラスチック収納用品、羽毛布団など回収対象も徐々に拡大。2022年の「プラスチック資源循環促進法」施行による消費者意識の高まりもあり、回収量は3年間で衣料品が約3倍、プラスチック製品が約4倍と大幅に増加しました。

「直近では、衣料品97トン、プラスチック製品112トン、スキンケア用PETボトル5.1トンを回収しました。量が増えればリサイクル効率も上がるので、通年での安定した商品展開も可能となりました。ポリプロピレン製収納ケースは、

VISIT >>> 無印良品 新宿靖国通り



2021年に「もったいない市」を最初に実施した新宿靖国通りの店舗。「ReMUJI」を展開する全国約50店舗の一つとして、店内には回収ボックスが設置されています。その店頭には素敵なリユース品が並び、回収品が商品として循環していることが実感できる場所にもなっています。

約20品目の新商品に再生されています。捨てれば見えなくなっても、地球には残っている。“先”を考えてぜひ、店頭に持ってきていただけたらと思います」(永戸順也氏)

2021年に「無印良品 新宿靖国通り」から、「もったいない市」と称し傷や包装汚れなど今まで捨てられていた商品も販売。現在は「わけあり品」として全国展開しています。

「弊社では、包材や資材の脱バージンプラスチック・リサイクル化を目指しています。衣料品1枚でも、ごみ箱ではなく店舗の回収ボックスへ持ってきていただければ、その小さな一歩が積み重なり大きな循環へとつながります。『自分の出したものがどこかで誰かの役に立つ』という手応え、そして、この商品が素敵だと思って買ったなら、結果サステナブルだったという体験、そういうものを増やして行って、ブランドへの深い共感が生まれてくれたらいいなと思います。生活者が無意識のうちに資源循環の輪に加わっている、そんな当たり前前の日常に我々も寄与していきたいです」(本釜氏)

南三陸BIOを中核とした



宮城県南三陸町は2011年の東日本大震災からの復興をめざすなか、同年末に策定した震災復興計画において「エコタウンへの挑戦」を掲げ、2013年には資源を地域で循環させる「バイオマス産業都市構想」を策定。未来志向のまちづくりは大きな成果を出し、環境省主催のグッドライフアワードを受賞しています。

生ごみを液肥(液体肥料)に変換するバイオガスプラント 「南三陸BIO」を中核に地域循環システム「南三陸モデル」を構築

宮城県南三陸町では全国に先駆け、地域循環システム「南三陸モデル」を構築しています。その中核となるのが、2015年10月に開所したバイオガス施設「南三陸BIO」。家庭や事業所から出る生ごみやし尿汚泥をメタン発酵させ、バイオガスと液肥を製造し100%資源として活用しています。バイオガスでは約60世帯分の電気が発電でき、普段は同施設内で利用、災害時には「南三陸BIO」が避難拠点となって活用されます。液肥は地域の農家に安価で提供。予約が始まるとすぐ埋まるほど好評で、液肥を活用した南三陸のブランド米「めぐりん米」は、ふるさと納税の返礼品にもなっています。

焼却炉を持たない南三陸町では、ごみ処理は近隣の自治体に委託していますが、生ごみを資源活用することで、ごみ処理費用の大きな減額も達成しました。震災からの復興と同時にバイオマス構想を進めたのは、震災で被害を受け、人口が大きく減ったまちの未来を見据えてのことです。

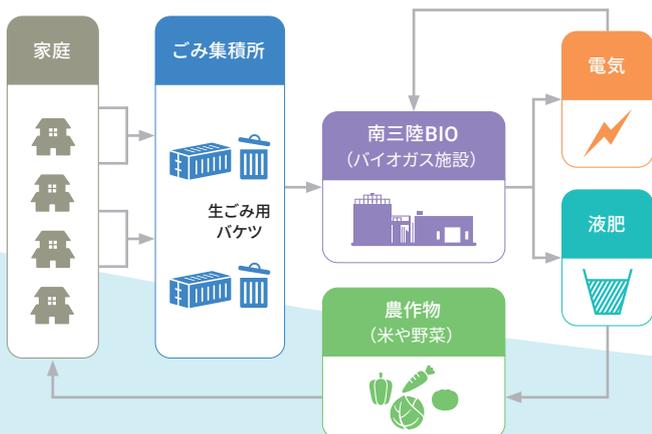
「住民の方に戻ってもらわないと復興はできません。安全なまちづくりと同時に、子どもたちに誇れるまちづくりをしていこうと、2011年末に策定した震災復興計画にエコタウンへの挑戦を盛り込みました」(三浦達也氏)

そのためには住民の協力が不可欠。生ごみの分別を始める1年ほど前から自治体内の68地区を回り、毎晩のように住民説明会を行いました。

「仮設住宅に暮らす方もいるなか、生活を立て直すだけで精いっぱいだという反発も当然ありました。でも、真剣

南三陸町の資源循環モデル図

市民の協力を得て、まちから出される生ごみやし尿汚泥を「南三陸BIO」にてメタン発酵させバイオガス(電気・熱)と液肥に変換。液肥は地域の畑や田んぼに資源として循環します。



(左から) 南三陸町農林水産課 環境係 係長 三浦達也氏、技術主幹 佐々木正彦氏



左/生ごみ用のバケツを各家庭に無料配布し、集積場の大きな生ごみバケツに中身を出してもらって仕込みます。24時間いつでも出せるのも便利。右/集積場のうち30カ所に無料の液肥タンクを設置。家庭菜園などへの活用も促しています。

に考えてくださるからこそのご意見です。きちんと向き合い、自分たちでインフラを持つ重要性やごみ処理コスト削減につながることなどを丁寧に説明するうち、協力して下さる方が増えていきました」(佐々木正彦氏)

まずは80世帯ほどのモデル地区で実証実験を行い、2015年10月から南三陸町全域で生ごみの分別収集を開始。24時間出せるようにする、回収品目を増やすなどの利便性向上も徐々に実施しました。循環システムの良さが伝わるにつれ、回収量は毎年増えています。

子どもたちの関心の高さも構想を後押ししました。町内の高校生は、環境学習の一環として生ごみ収集のパンフレッ

地域循環システム **南三陸モデル**

「南三陸BIO」はアマタサーキュラー(株)が運営。生ごみの処理能力は1日約10.5トンで、発生するバイオガスで毎日約600kwhの発電を行っています。あわせて製造される年間約4,500トンの液肥は、地域の農業で活用。ブランド米「めぐりん米」も誕生しました。



ICTと行動経済学「ナッジ」を活用した社会実証プロジェクトで貢献

南三陸町では、ICTと行動経済学(ナッジ理論)を組み合わせた解決策を行いました。最初に取り組んだのはデータ収集で、ごみ収集時にタブレットでデジタル入力し、地区ごとの回収量を可視化。回収量が少ない地域で重点的に施策を行い、その効果も測定できるようにしました。また、行動経済学に基づく二つの施策も実施。一つ目は「感謝」に注目した施策で、集積所に生ごみ分別協力への感謝状を掲示しました。掲示した場所では生ごみ回収量が増加し、異物混入も減少しました。二つ目は「損失回避性」を活用した施策で、ごみ袋販売場所にポスターで「一般ごみの焼却に年間4,200万円かかっている」ことを掲示。これにより生ごみ回収量が約15%増加し、住民の協力率も60%から70%程度に向上したと推定されます。



液肥散布の様子



ごみ集積所

左/高校生が作成した生ごみ収集パンフレットは、取り組み推進の大きな力に。右/住民が自発的につくった環境紙芝居に登場する「めぐりんちゃん」「メタンくん」は南三陸BIOのキャラクターに。

トを作成。小中学生が社会科見学で同施設を訪れるほか、幼稚園や保育園での環境紙芝居も毎年実施しています。震災直後からボランティアで参加した企業の協力もありました。施設を運営するアマタサーキュラー(株)に加え、NECソリューションイノベータ(株)は、ICT活用や行動経済学を活用した仕組み構築に貢献しました。

「1~2万人規模のまちで成立する生ごみの資源循環モデルはほかの多くの地域でも応用可能とあって、全国の自治体や企業が視察に訪れています。今後プラスチック分別の導入も検討しています。これまでの経験を活かし、さらに住民と対話を重ねていきます」(三浦氏)



左上/ナッジ理論の検証を行うため、任意のごみ集積所に感謝状が設置されました。左下/実際に掲示された感謝状。右/感謝状とともに「感謝レポート」として異物混入状況などのデータも掲示。



NECソリューションイノベータ株式会社
イノベーションラボラトリ
プロフェッショナル

日室 聡仁氏



「南三陸モデル」に見る住民が主体的に支える資源循環

アマタグループでは「持続可能な社会の実現」を目指し、資源循環に留まらない企業経営や地域運営のサステナビリティ移行支援を提供しています。特に、互助共助型で無駄を生まない“社会的”な生活スタイルを促す社会インフラ「MEGURU STYLE (めぐるスタイル)」を掲げ、その開発・展開に取り組んでいます。

「南三陸BIO (ビオ)」を運営するきっかけは、会社として震災直後にボランティアで訪れたこと。震災の翌月から社員たちが活動するなか、南三陸町の方と会話を重ねるうちに理念を共有でき、まちづくりを通して復興に協力しようと2012年3月には

現地オフィスを開設。まずは環境省の助成金で生ごみ循環システムの実証実験を住民の協力を得て行ったうえ、2015年10月に開所しています。「南三陸BIO」は生ごみからのメタンガス生成だけでなく、残渣物も液肥として活用する100%循環を実現しています。この液肥活用についても、同様のバイオ装置を導入していた京丹後市の液肥を使い、農家の方の協力で有効性の実証から始めました。

啓発活動や教育も大事です。南三陸町はFSC認証(森林)とASC認証(海洋)の両方を持つ世界で唯一のまちで、年に一度、全国の研究者と市民が参加し、森・里・海・人の循環の事例を共有する「南三陸いのちめぐるまち学会」が開催されています。アマタもこの学会に参加しているほか、小中

“持続可能な循環型社会の構築は、私たちのような民間企業だけでできることは限られています。「みんなでやろう、まちづくり」をキーワードに、自治体や地域の住民の方々、研究者の方々、製品をつくる企業の方々と協力して取り組んでいます”

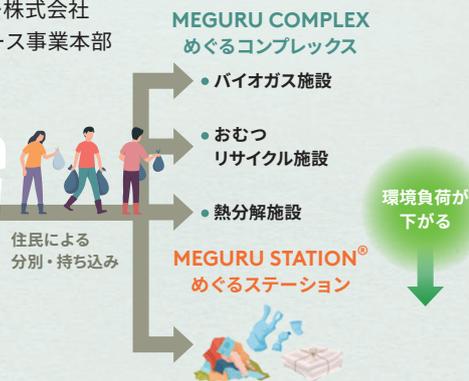


岡田 修寛氏

アマタサーキュラー株式会社
サーキュラーリソース事業本部
南三陸BIO 所長

一般的な可燃ゴミ

紙・布類	36.8%
生ごみ	28.1%
プラ類	14.7%
草木	6%
その他	14.5%
うち、使用済紙おむつ	約5%



※ 出典：環境省「容器包装廃棄物の使用・排出実態調査の概要(令和4年度)(全国8都市平均)」 「令和4年度使用済紙おむつ再生利用等に関する調査業務報告書」

「MEGURU COMPLEX」イメージ図

「MEGURU COMPLEX」では「燃やさないまち」を提案。焼却ごみのうち水分の多い生ごみ、使用済紙おむつを分別し資源化。その他の衛生ごみは化石燃料に頼らない熱分解で処理し、灰はセメント原料などに利用することで埋め立てへの依存も最小化。「MEGURU STATION®」を通じて、地域住民の互助共助コミュニティを醸成し質の高い資源分別による循環の価値を生み出す。

「行動の10年」(Decade of Action)は、貧困やジェンダーから気候変動、不平等、資金不足の解消にいたるまで、世界の最重要課題すべてについて、持続可能な解決策を加速度的に講じることを求めています。



学校生に施設見学に来てもらったり、高校の環境クラブ活動に小規模のバイオガス装置を提供したりといった取り組みを行っています。南三陸町で回収された生ごみへの異物混入率が1%程度と低いのは、「分別して当たり前」という住民の意識の高さの表れです。小さな循環型社会は、集まれば社会を動かす大きな力になります。1万人規模で実現したこの資源循環コミュニティモデルは、全国でも注目されていて自治体関係者や研究者、企業、学生などが視察に訪れます。2025年、見学者は700名を超えました。

今後は、福岡県大刀洗町などで導入いただいている、互助共助コミュニティ型資源回収ステーション「MEGURU STATION®」もさらに展開し、生ごみ以外も含め焼却・埋め立て、化石燃料に依存しない資源循環システム「MEGURU COMPLEX」を構築できればと考えています。南三陸から、焼却炉が不要な「燃やさないまち」の姿を発信したいですね。

アマタグループ●1979年創業。金属資源としての産業廃棄物の利用提案から事業を開始し、現在では持続可能な企業経営・地域運営への移行戦略支援をはじめ、100%再資源化サービス、環境認証審査サービス、環境管理業務のICTおよびアウトソーシング、さらに国内で培った資源循環やサステナビリティ経営・地域運営のノウハウをアジア・大洋州地域に展開する海外事業などを提供。



基

本のキ

プラのなぜ?なに?

プラスチックの基本と、あっと驚く雑学ネタをご紹介します。
プラスチックやリサイクルに関する知識や興味を深めて
地球にやさしい“循環する暮らし”を。



驚

き

ペットボトルの形は なぜいろいろ?

ペットボトルの形には、中身を守るための工夫が詰まっています。四角い凹凸のあるタイプは、飲料を熱いまま詰めてから冷ます製品向けの「耐熱用ボトル」。温度が下がると中の空気が縮むことでへこもうとする減圧の力を吸収するため、あえて凹凸を設け、厚みも持たせています。また、丸いタイプの「耐圧用ボトル」は炭酸飲料に使われ、内側から膨らむ圧力を均等に分散する設計。底が花のような形なのも、強い圧力に耐えながら安定して立つようにするための工夫です。さらに熱と圧力の両方に対応する「耐熱圧用ボトル」や、ミネラルウォーターなどを入れる軽さに特化した「無菌充填用ボトル」もあります。見た目の違いは、飲み物の特性に合わせて考えられた知恵の結晶なのです。

耐熱用ボトル

お茶やジュースなど



耐圧用ボトル

コーラやサイダーなど



耐熱圧用ボトル

果汁入り炭酸など



無菌充填用ボトル

ミネラルウォーターなど



日本初! ペットボトルの キャップが糸状の素材に!?

飲み終えたあと、ペットボトルのキャップを外して分別する、そんな何気ない習慣の先でキャップから新しい素材が生まれています。工場内で排出されたキャップを原料の一部に使い、モノフィラメントと呼ばれる一本の細い樹脂素材が日本で初めて開発されました。手がけたのは、廃棄物を価値ある素材に変えるアップサイクルブランド/プロジェクト「ReTA BASE」。これまでキャップのリサイクルは金型を使った樹脂成形が一般的でしたが、糸状に加工するモノフィラメントに着目し、金型に頼らない素材開発を実現。原料回収から生産までを国内で完結させ、環境負荷の低減にもつなげています。使い終わったキャップが、新たな製品へつなげる循環の一步として期待されています。



「ReTA BASE」を運営する株式会社TRIFE DESIGNに加え、
日本山村硝子株式会社、株式会社イノベックスが連携して
日本初の技術を開発。

画像提供：日本山村硝子株式会社

COLUMN

それゆけ! 元プラ調査隊

プラスチックから生まれ変わった
モノを我々は絶対に見逃さない!



VOL.10

ペン

メモを取ったり書類にサインをしたり、毎日のように手にするペンも再生プラを使用。元プラ製品がどんどん身近な存在になっています。

近年、ごみ収集車やごみ処理施設でのリチウムイオン電池の発火事故が社会問題となっています。2026年4月には「改正資源有効利用促進法」が施行され、製造事業者等による回収・リサイクルが義務化されることになりました。1996年に市民団体として発足したNPO法人「持続可能な社会をつくる元気ネット」は、当協会と連携し生活者への啓発活動を行っています。理事長の鬼沢良子氏に、取り組みの内容や課題などお話を伺いました。

中間処理施設で発生した火災事故への 住民の反応に芽生えた問題意識

「持続可能な社会をつくる元気ネット」は、今年で設立30周年になります。当時は廃棄物を埋め立てる最終処分場の残余年数が7～8年という社会課題があり、市民も一緒になって解決したいという思いで始めました。リサイクルには行政だけでなく生活者への周知も大切だということで、市民の視点を生かす役割として容り協の広報専門委員も務めていたのですが、2019年に容り協の広報ご担当者からリチウムイオン電池によるトラブルが増加していることを聞きました。これは、廃棄物やごみ問題に向き合ってきた私たちが知らなかったこと。一般の生活者には、なおさら情報が不足していると感じました。



火災が発生したリサイクル工場



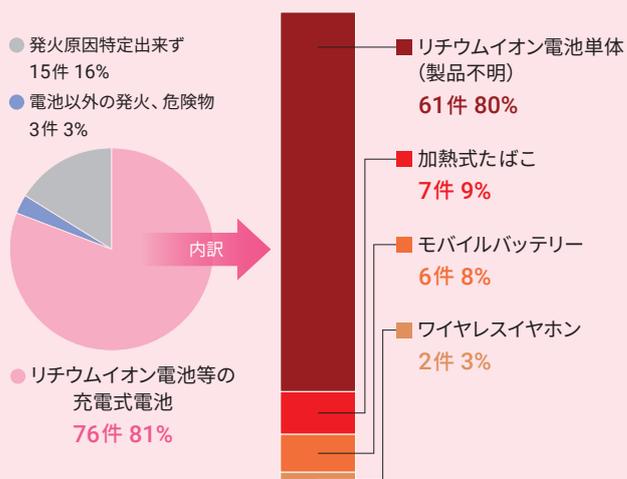
発火原因物の例「加熱式たばこ」

2019年度に起きた大規模火災では工場の一部が焼失し、自治体からの引き取りを停止せざるを得ない状況になりました。リチウムイオン電池は衝撃を与えるとショートによる発火につながり、パッカー車での圧縮を避けるために平車で収集するなどの対策を取る自治体も増えています。



容り協と共同でリチウムイオン電池の危険性を伝える短い動画を制作し、生活者への啓発活動に努めています。

発煙・発火トラブルの原因物の内訳 (令和7年度12月末)



モバイルバッテリーやワイヤレスイヤホンなどの小型家電では、リチウムイオン電池が本体から取り外せない製品や、内蔵されているのが分かりにくいものもあり対策が急がれます。

それを痛感したのは、東京都の廃棄物収集事業者の中間処理施設で火災事故が発生した際の市民の反応です。火災が発生したのち、事業者が近隣住民に事故の説明と謝罪に訪問した際、「二度目はないですよ」と言われたというのです。火災事故の原因は、生活者が知らずに出したリチウムイオン電池で、事業者が悪いわけではありません。正しい情報を伝える必要性をいっそう強く感じ、啓発活動を開始しました。

2019年10月には、消費生活に役立つ情報提供と交流を目的とした「くらしフェスタ東京2019」(東京都主催)で容り協と一緒に問題提起を行いました。その後はコロナ禍により対面での活動が難しくなったため、2020年には啓発動画を制作し300人にメールでアンケート調査を実施しました。

リチウムイオン電池問題は

繰り返しの啓発が重要。

私たちNPO法人が果たす役割は

まだまだあると感じています

鬼沢 良子氏

NPO法人 持続可能な社会をつくる元気ネット
理事長



「こんな大変な問題になっているとは知らなかった」という回答も多く、環境問題に関心のある人であってもリチウムイオン電池のトラブルは知らないという現状を目の当たりにしました。若年層への啓発の必要性も感じ、翌年には大学生との意見交換を行い動画を短く編集し直しました。その上で彼らにSNSなどで拡散してもらったところ、アクセス数が約5倍になるなど大きな反響がありました。

ほかにも、マルチステークホルダー会合を開催し、自治体、中間処理業者、専門家、回収事業者で情報を共有しています。

課題は分別・回収方法の分かりにくさや 回収拠点の少なさ

リチウムイオン電池は衝撃に非常に敏感で、中間処理施設内でごみ袋を破る際の衝撃でも発火する可能性があります。リチウムイオン電池を使用した製品には、スマートフォンやゲーム機、電動自転車などがありますが、なかでも懸念されるのは季節が終わると廃棄されやすいハンディファンや空調作業着です。プラスチック製品に内蔵されているので、プラごみとしてほかのプラ製品と一緒に捨てられてしまう危険性が高いと考えられます。

今、リチウムイオン電池の課題解決に必要なのは、「分かりやすく出しやすい仕組み」です。分別・回収方法が分かりにくく、回収拠点もまだ少ない。自治体だけでなく、メーカーや販売店も協力して回収・啓発を行う必要があると思います。リチウムイオン電池の収集日を設ける、出しやすい場所に回収ボックスを設置するなどの枠組みづくりで改善できるのではないのでしょうか。リチウムイオン電池を含む製品には、リサイクルを促す「Li-ion」とマークが記載されていますが認知度は高くありません。リチウムイオン電池でも、専用の回収袋をつくることは周知にもつながる有効な手段だと思います。リチウムイオン電池を使用する製品は増加していくでしょう。どんな製品に含まれているのか、どのように回収するかを繰り返し伝えていくことが重要だと考えています。



リチウムイオン電池問題に着目し、
チラシ作成や「出前講座」など
情報発信に力を入れています”



チラシのダウンロードは
こちら▼



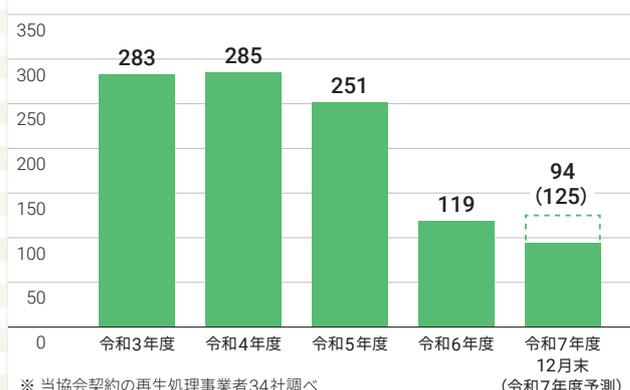
大滝 歩

公益財団法人
日本容器包装リサイクル協会
プラスチック容器事業部 副主査



リチウムイオン電池による発煙・発火事故は平成30年ごろから件数が急増し、令和元年には300件[※]に達しました。この2年は発生件数が減少してきていますが、リサイクル工場で起こった火災により消火活動だけで年間約2週間分の稼働時間が失われています。さらに、火災に遭った資源は再商品化に適さず、リサイクル率にも悪影響を及ぼしています。こうした状況を受け、当協会では市町村や事業者、関連団体を対象に年間約20回の「出前講座」を実施し、火災防止対策や回収方法などの改善策を関係者と一緒を考え取り組んでいます。出前講座は当協会HPからご依頼いただけるほか、啓発用チラシのPDFも自由にダウンロードして活用いただけます。リチウムイオン電池問題にいち早く着目し、解決に取り組んできた活動が法整備にも反映されつつあることを大変心強く感じています。今後も当協会が有する情報やノウハウを幅広く共有してまいりますので、ぜひ有効活用してください。

プラスチック製容器包装及び分別収集物 再生処理事業者での発煙・発火トラブル件数の推移[※]





協会の主な取り組み内容をご紹介します

容 STATION

「エコプロ2025」に出展し 子どもたちに分別やリサイクルの 大切さを発信しました

St.1

当協会は令和7年12月10日から12日まで、東京ビッグサイトで開催された「エコプロ2025」に出展しました。エコプロは、環境やSDGsに関するさまざまな取り組みを紹介する国内最大級の展示会で、子どもから大人まで幅広い来場者が訪れます。協会は今回の出展を、分別やリサイクルの大切さを生活者の皆さんに伝える機会と位置づけました。

協会ブースでは、「ゲーム+クイズ+解説+映像」を組み合わせた体験型の展示を実施しました。来場者がクイズに挑戦しながら、「なぜ分別が必要なのか」「正しく分けるとどうなるのか」を考えられる構成です。特に小学生を中心とした子どもたちが、楽しみながら分別のポイントを学ぶ姿が多く見られました。

また、分別された容器包装が再商品化されたのち、どのような製品に生まれ変わっているのかを、現物やサンプルを使って紹介しました。実際に見て触れることで、リサイクルをより身近に感じてもらえるよう工夫しています。子どもたちにとって、身近な容器が何にリサイクルされているのかを知る機会が多くありませんが「こんなものになるんだ」と驚きながら、興味深そうに展示を見入る姿が印象的でした。

さらに今回は、分別の重要性への理解を深めてもらうため、暮らしの変化とともに容器包装が増えてきた歴史と容器法制定の背景もパネルや映像で紹介しました。大量廃棄が社会問題となった時代から、分別やリサイクルの仕組みが整えられてきた歴史を伝えることで、容器包装リサイクル制度の役割や意義をより具体的に理解してもらうことを目指しています。

あわせて、「軽くすすぐ、汚れを取る」「キャップやラベルは分離する」「危険物はいれない」といった分別のポイントを伝えるとともに、これからの社会を担う次世代の子どもたちに向けて、分別やリサイクルの大切さを積極的に発信しました。

クイズの回答リーフレットは、持ち帰るとブースのミニチュアになる仕掛けとし、家庭での会話につなげる工夫も行っています。分別は一人ひとりの行動ですが、それが自治体や企業とつながり、社会全体の循環を支えていることを実感してもらえる展示です。

今回のエコプロ出展を通じて、協会は分別やリサイクルを「知っていること」から「日々の行動につなげること」へと広げるきっかけを提供しました。今後も、生活者の皆さんとともに、循環型社会づくりを進めていきます。



「エコプロ2025」容リ協ブースの様子。協会職員の説明を熱心に聞いてもらいました。



リサイクル製品の展示。

St.2

令和8年度再商品化委託申し込み
令和7年12月8日～8年2月13日

当協会では政令(容リ法施行令、平成7年12月15日施行)に基づき、主として市区域に設置された515カ所の商工会議所(令和7年4月時点)の全国組織である日本商工会議所、および町村区域に設置された1,620カ所の商工会(令和6年4月時点)の全国組織である全国商工会連合会に業務委託を行い、そのネットワーク力を活かすことで効率的に各地の特定事業者からの再商品化委託申し込みの受付や普及啓発活動を行っております。

特定事業者に向けた「容器包装リサイクル制度説明会・個別相談会」を令和7年11月7日～8年2月4日にわたり、札幌、盛岡、仙台、山形、新潟、富山、東京、横浜、浜松、名古屋、京都、大阪、神戸、鳥取、広島、徳島、福岡、長崎、熊本、那覇で開催し約1,700名の参加をいただきました。制度説明会では、容リ制度の概要や再商品化義務の有無の判定方法などを説明。個別相談会では、各社の事業で使用している容器包装について「再商品化義務が生じるのかどうか」という相談が多く寄せられました。また、初めて委託申し込みの手続きを担当される方には、申込数量の算出や委託料の算定方式といった具体的な手続き方法の案内を行いました。



特定事業者に向けた「容器包装リサイクル制度説明会」の様子。



容リ協日誌 (令和7年12月～令和8年2月)

● 容リ協行事

令和7年

- 12月1日 令和7年度第2回定時理事会開催
- 8日 令和8年度再商品化委託申し込み受付開始
- 10～12日 エコプロ2025へ出展
- 11日 令和7年度臨時評議員会開催
- 16～17日 入札説明会開催
(16日 ガラスびん、プラスチック製容器包装)
(17日 紙製容器包装、PETボトル)

令和8年

- 1月15日 開札式(プラスチック製容器包装)
- 2月3日 開札式(ガラスびん、紙製容器包装、PETボトル上期)



令和7年度
市区町村からの引取実績
再商品化製品販売実績

1. 引取実績

区分	4～12月累計		
	引取量(トン)	前年同期比(%)	
ガラスびん	219,637	95.7	
内訳	無色	65,564	95.7
	茶色	68,752	95.0
	その他色	85,321	96.2
PETボトル	129,010	88.0	
紙製容器包装	9,193	94.8	
プラスチック	469,165	96.6	
内訳	白色トレイ	198	92.8
	プラスチック製容器包装(容リ法)	337,934	82.4
	分別収集物(プラ法)	131,033	173.7
	うち容リプラ*	115,609	176.1
	うち製品プラ*	15,424	157.8
	うち産廃プラ	0	—

※「うち容リプラ」および「うち製品プラ」は組成比率より算出

2. 再商品化製品販売実績

区分	4～12月累計		
	販売量(トン)	前年同期比(%)	
ガラスびん	205,280	93.6	
内訳	無色	61,413	96.7
	茶色	63,271	90.8
	その他色	80,597	93.5
PETボトル	103,426	80.7	
紙製容器包装	9,164	96.7	
プラスチック	276,003	88.0	
内訳	白色トレイ	181	88.4
	プラスチック製容器包装(容リ法)	198,226	76.0
	分別収集物(プラ法)	77,596	148.1

INFORMATION

「容リ協ニュース」「年次レポート」の

▶ 郵送先変更、郵送停止をご希望の方はこちら



▶ オンライン閲覧(無料)をご希望の方はこちら

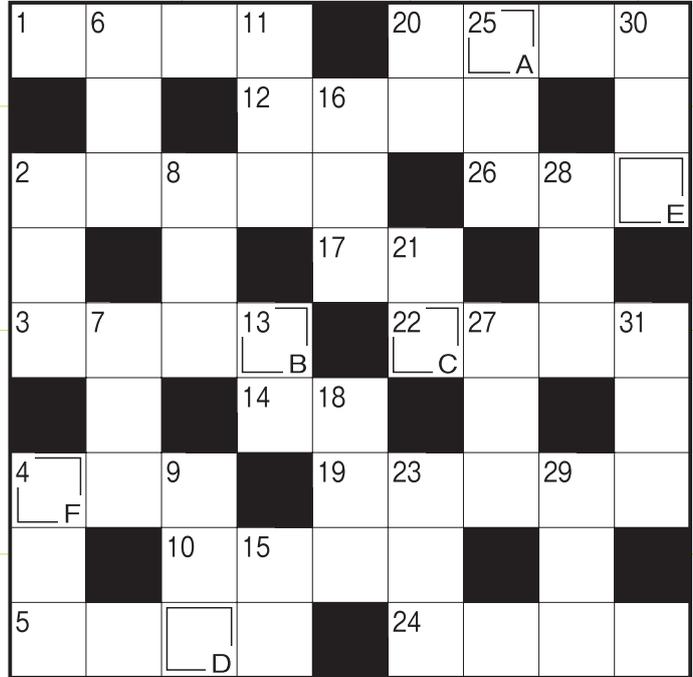




eco

ワードパズル

パズル制作/ニコリ



問題

ヨコとタテのカギを読んでマス目を埋めよう。
A-Fの文字を並べてできるECOワードはなに？

ルール●文字はすべてカタカナで、1マスに1文字を入れてください。小さい文字(ヤ、ヨ、ユ、ツなど)は大文字として扱い、長音「ー」は1マスに入れ、濁点・半濁点は取り出さず清音と区別します。

タテのカギ

- 2 規模が大きな会社のこと。○○○企業
- 4 コンビニエンス○○○やドラッグ○○○にエコバッグを持って買い物に行く
- 6 サッカーなどでわざとプレイで時間を稼ぐ○○○行為は反則になることも
- 7 親友とは深い○○○でつながっている
- 8 ○○○をなくしてバリアフリーな街に
- 9 豆腐製造時に出来ます
- 11 電線なしでつながっている
- 13 彼は○○がいいね、すぐに上達するよ
- 15 学校のクラスをこう言います
- 16 工業○○○ ○○○学習
- 18 東京・埼玉あたりの旧国名
- 20 ○○があっても優勝するぞ
- 21 鋭く尖った大きな歯
- 23 飼っている人も多い小鳥
- 25 お寺の地図記号はこれが元になっている
- 27 ○○○小説では名探偵が活躍したりする
- 28 読み札と取り札がセット
- 29 祭りの日に○○○で焼きそばを買った
- 30 穴の開いた服に○○○で継ぎを当てる
- 31 マスカットもこれの一種

ヨコのカギ

- 1 2026年4月より、小型○○○○イオン電池を内蔵したモバイルバッテリー等が指定再資源化製品に追加されることに
- 2 地球○○○○○を防ぐため温室効果ガスの排出削減が急務です
- 3 アラスカに次いで、米国で2番目に広い州
- 4 心がまっすぐ、正直なこと
- 5 牛肉や豚肉の白い部分
- 10 SDGsの目標9は「産業と技術○○○○の基盤をつくらう」
- 12 SDGsの目標12は「つくる○○○○つかう○○○○」
- 14 ○○に通って体力作りをしています
- 17 ○○と帰りで違う道に行く
- 19 リユースとも言います
- 20 家庭から出る○○○○を再資源化する地域循環システム「南三陸モデル」が話題に
- 22 浴槽のことです
- 24 SDGsの目標16は「平和と○○○○をすべての人に」
- 26 ゆっくり○○○をかけて考えよう

リサイクルでつなぐサステナブルな未来
容協ニュース No.101 2026年2月発行

編集・発行：公益財団法人 日本容器包装リサイクル協会
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政福祉琴平ビル 2階
(企画広報部)tel.03-5532-8610 fax.03-5532-9698
URL : <https://www.jcpra.or.jp/>

●禁無断転載



この用紙は、FSC® 認証材および管理原材料から作られています。

パズルの答えとecoワードの解説はコチラ

SNSのフォロー、登録はこちら

